

「今こそ」学校では

AED問題解決型救急救命シミュレーション研修の 必要性がある！



(AED 講習のみでは不十分なことを体験する研修会の成績を報告)

救急救命処置に AED(自動的除細動器)が必要で、人が集まる場所にそれを設置して、必要なときにだれでも機器を簡単に使用することが出来る。学校でも AED が設置され、救急救命法の講習会が行われている。

しかし大きな問題点が一つ予想される。心肺蘇生が必要な場面に自分が遭遇したときに、どのように実際に行動できるかを不安に思っている人が多いことである。

本校では AED を含む通常の救急救命処置の講習会を定期的に行っているが、上記のような理由で問題解決型救急救命シミュレーション研修会を昨年 12 月 8 日に行った。今回その成績がまとまったので、問題点の概要を解説し、今後の学校救急救命研修の参考としたい。

この研修会の特徴は「生徒が倒れ、救急救命処置が必要と判断、心肺蘇生術、AED 施行、救急車到着」に至る過程を、3 班に分けた教職員に役割分担や実行の流れを教えずに実行させたことである。また各班ともに、携帯電話あり、なし、の二つの場合の行動も想定して行った。このシミュレーションプログラムの指導員たちは、全過程の終了までを写真やビデオに収録し、ポイントとなる行動までの時間経過を測定したが、途中で実行者たちに口出ししないことを原則とした。終了直後にアンケート調査を行い、その成績を後で集計した。指導員たちは各班の流れの中でみられた問題点を整理した。

この問題解決型シミュレーションのよいところは、自分たちの行動から問題点を直接に体験し、共有できたことである。そしてこの成績が次回の研修時に役立つ資料となったことである。

本研修での結論は、救急救命法の基礎知識と技術を身に着けたうえで、学校の現場でそれが達成される流れを如何に短縮できるかの問題解決型シミュレーション研修を行うべきであるということである。

浦和学院高等学校

校長 小沢 友紀雄

以下に本校で施行された救急救命シミュレーション研修の成績を述べる。

<http://www.uragaku.ac.jp/blog/uragaku/2011/05/post-2.html>

校長略歴

理事長・校長 小沢 友紀雄 (おざわ ゆきお)

1962年 日本大学医学部卒業

国立東京第二病院 (現・国立病院東京医療センター) 研修

日本大学医学部第二内科入局

その後、日本大学付属板橋病院循環機能室長、同病院 C C U 運営委員長

1980~1982年 米国ノースカロライナ大学心臓内科勤務

帰国後、日本大学医学部助教授、教授 (第二内科学教室)

日本大学医学部付属板橋病院内科 II 部長

1984年より、中国新疆医科大学との交流を始め、以後共同研究を開始する。

2001年定年退職後、日本大学総合科学研究所教授、医学部客員教授となる。

現在、学校法人明星学園理事長、MJG心血管研究所長、明星学園健康科学センター長、

同学園浦和学院高等学校長などを務める。





問題解決型「救命救急AEDシミュレーション」研修



看護師である粕川養護教諭より研修の説明が行われる



生徒・教職員の
安全を最優先。
医師（医学博士）が
校長である浦学ならではの
臨場感あるシミュレーション研修を実施
そして、大切なことは「検証」を欠かさないこと!!



準備体操、ストレッチで研修に臨む

平成 23 年 12 月 8 日、教職員研修のプログラムとして「救命救急AEDシミュレーション」が行われた。本校には、AEDが校内3ヶ所（体育館・部活動食堂棟・事務室前）に設置されている。マンモス校及びスポーツ強豪校ならではの安全面の配慮である。しかし、その装置が実際に事故ある時に使われないのでは「宝の持ち腐れ」になりかねない。事故が起きてから「訓練はしていたが…」「実際に使ったことがないから…」では大切な生徒の命は守れない。

本校校長で医師である小沢友紀雄は、生徒・教職員の安全には日頃からあらゆる面での予知予防、管理を教職員に強く呼び掛ける。また、校内に健康科学センターを組織化し養護教諭兼看護師を配置し、「マンモス校浦学」をサポートしている。教職員は、12月のシミュレーション研修、入試後の2月早々には検証に入り、問題解決型研修に前向きに取り組んでいる。

教職員それぞれが瞬時の行動を実践



事務室出動1-1



事務室出動1-2



事務室出動1-3



事務室出動1-4



事務室出動1-5



事務室出動1-6



事務室出動2-1



事務室出動2-2



事務室出動 2-3



事務室出動 2-4



事務室出動 2-5



事務室出動 2-6

携帯電話からの通報パターンや電話がない場所からのパターンなどさまざまな状況から事務室へ連絡。事務室職員にはどのようなパターンで連絡があるかは、あえて伏せていた。「訓練があります」とだけ伝えられ、事務室にも緊張感が漂った。しかし、電話を受けた職員が「第2体育館で生徒が倒れました。AEDを運びます」と、すぐに自転車に乗り換え、現場(第2体育館を想定)に急行した。感心したのは、AED固定場所に取りに行く者と、自転車の鍵を入れ、準備する者がいたことだ。また、若い職員は率先して指定場所に行って急行する訓練にも即応できていた。



「走る、走る」教員も4班に分かれ、指定場所にAEDを取りに行く。若手教員も息を切らしながら全力疾走。研修とはいえ、いきなりの記録係の出現に「びっくり」。この1分が「重要」と、懸命に走っていた。





見て・聞いているだけでは役立たない。実際に「触れ・感じ・体験」することが万が一に役立つ基本となる

生徒対象の「救急救命講習」も実施 1分1秒の大切さを学び、近くの仲間を助ける—これが基本



問題解決型の基本は、継続して繰り返し、検証すること ➡ 「やいっばなしにしない」

なぜ、浦学は多くの受験生に選ばれるのか ➡ 「何事にも「本気」に取り組む」

どうしたら生徒たちを危険から守れるのか ➡ 「自分の子どもだから…安全を願う」